

会話のターン交替

— 日本語母語話者と学習者の比較を通して —

金 銀実

1. はじめに

人は会話するとき、役割を分担しながら会話を進めていく。役割の分担というのは、話し手と聞き手に分かれ、その役割の交替によって会話を促していくことである。その役割の交替をターンの交替という。今回は日本人同士と留学生同士の会話をサンプルにして、その会話の分析を通して日本人母語話者と日本語学習者が会話の際ターン交替の上でどのような区別が生じるか考察してみる。

2. 資料の概要

分析資料には、2001年4、5月に資料収集を目的として実施された大学生二人一組の自由談話を用いた。実施場所は広島大学キャンパス。日本人12組と留学生14組による会話、計26組である。テーマは自由として、一組5分ぐらいを目安としたが、ペアによって多少の差がある。留学生の出身地は中国、韓国、イギリス、カンボジア、インドなど色々であるが、ここでは全部学習者として見ている。また、留学生の日本語能力は中級以上であった。

3. ターン交替の種類

それでは、上の資料を例として、ターン交替にはどんな場合があるか見てみよう。

話し手が話しているとき、聞き手はあいづちを打ちながら聞き手の役割を果たしている。話し手がターンを譲ったと見られたとき、あるいは話が一段落終わったと見られた時、聞き手はターンを取り、話し手に回る。

例1：

A：00の誕生日プレゼント、もう買ったん？

B：(d) 昨日買ったよ。

例1でBさんはAさんが「買った？」という疑問文で自分に答えを求めていると判断し、ターンを取った。

例2：

A：本キャンまで結構大変やったけどなあ、ほんまに

B: (c) 長かったんかいねえ？結構長かったかー。

例2ではBさんがAさんがキャンプの日まで大変だったと言う情報を自分に伝え、この発話が終了したと判断し、進んでターンを取った。

これが二人の会話の一番基本的な形とも言える。しかし、実際の会話は絶対例に上げたような一問一答の形で進まない。聞き手は話し手がターンを譲っても取らなかつたり、話し手の発話が終了してない時に発話が終了したと間違っって判断し、ターンを取ってしまったりする場合もある。

ターンの交替は、Sacks/Schegloff/Jefferson(1974)によると、次のようなメカニズムで起こると言う。

- (a) もしこれまでのターンが現在の話し手が次の話し手を選ぶと言うように組み立てられたのなら、選ばれた人物が次のターンで話し始める権利を持つ。
- (b) もしこれまでのターンが「現在の話し手による次の選択」を伴わずに組み立てられていたのなら、自己選択が導入され、誰であれ最初に話し始めた人物が発言の権利を得る。
- (c) もしこれまでのターンが現在の話し手が次の話し手を選ばないと言うように組み立てられていたのなら、現在の話し手は誰か別の人物が自己選択しない限り話し続けるだろう。

確かに、今回の会話資料でも、多くのターン交替は、このメカニズムで説明されたが、少し複雑なケースもまた観察された。それは現在の話し手が次の話し手を選ばない場合に、誰からの自己選択がなく、また現在の話し手も話しつづけない場合である。もちろんいずれは誰かによって、すなわち「現在の聞き手」か、「現在の話し手」のどちらかがターンを取るようになるが、それまでに何度か「自己選択」をしない行為が繰り返されるのである。

「自己選択」をしない行為の繰り返しの結果は Sacks/ Schegloff/Jefferson(1974)の(b)の「別の人物が発話権を得る、あるいは(c)の話し手が話し続けるだが、そうすることは、ターン交替への過程を無視した結果のみの分析になる。

そして、今回は Sacks/ Schegloff/Jefferson(1974)と大浜 (2000) を元にして、会話資料に見られたターン交替を以下のような7タイプに分類した。(図1を参照)

- d : 話し手からターンを譲られて、ターンを取る。話し手からの質問や意見を求められた場合が、これに当たる。(例1)
- c : 話し手の発話が終了した後で、自分から進んでターンを取る。(例2)
- b : ①話し手のターンが終了したときに、ターンを取らない。沈黙、笑いも含まる。

例3 :

A : うん、で、泊まる場所もまだまだ決まってないから 心配してる

B : (b) そっかー

②また話し手のターン内で、相手の言いたいことを補足し、文を完成する。

例4 :

A : うん、なんかもー、なんかさーあの ひ、秘書検定とかに使うような

B : (b) ソフトタッチ?

f : 話し手の発話が終って、聞き手がターンを取らないで、話し手が発話を続けた。

例5 :

A : なんかねー歌をすごい作るんよ、お母さんは (f) 歌詞もメロディーも自分で作る

B : (b) 歌?

g : 話し手の発話が終って、聞き手が自分からターンを取らない。その時、現在の話し手でもターンを取らず、更に現在の聞き手もターンを取らなかった。

例6 :

A : ちょっと離れた (g) (・・・) 動くよ

B : (b) ちょっと離れた? (g) うーん

i : gの後に、現在の話し手、もしくは現在の話し手より、発話された。

例7 :

A : 中国語と日本語どこが違うか (g) うん

B : (b) あっ、いいですね (i) あの一、どの先生の授業ですか

h : 話し手の発話途中に、聞き手がターンを取った場合。短い文の重なり（重なり部分があってもなくても情動的には等価）は、これに含めない。

例8 :

A : あ、本当? あっ、そうなんだー。そりゃ、気付かんか。

B : (h) だから、十二時回って、十二時までぎりぎりまでやってたと思うよ。

P・S :

① ターンを取ろうとして失敗したものは、分類に含めない。

② ターン交替としては見られない聞き手の発話はaとみた。

a : 相手の発話途中に入ったもの。それが述べられても、完成にはならないもの。ターンは取らない。

例9：

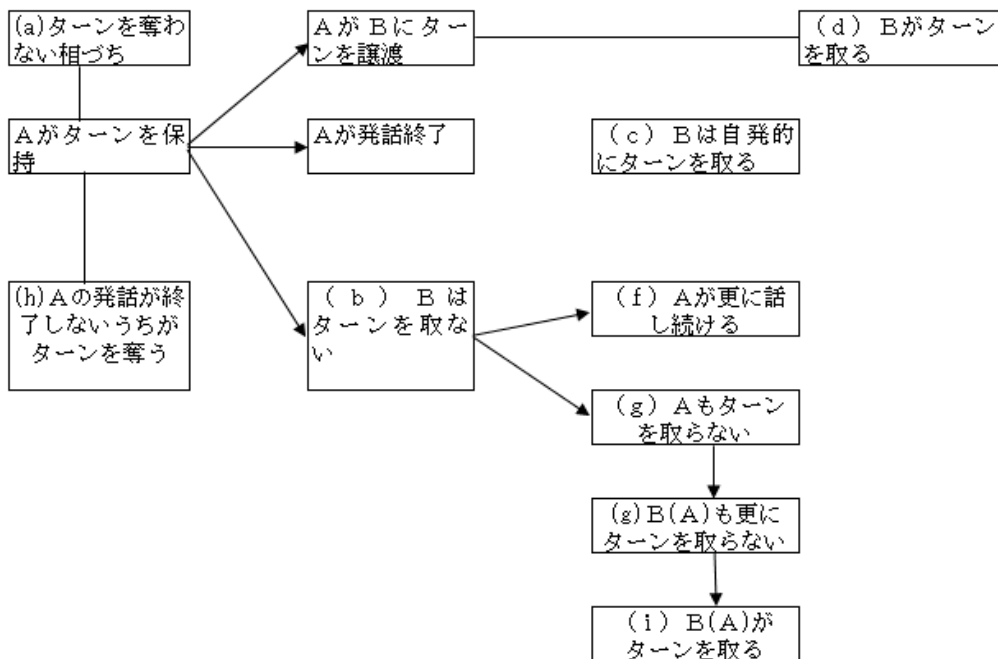
A：なんかこないだゆうちゃんに会ってねー ゆうちゃんとわあーって話してー

B： (a) うん

(a) うん

以上がターン交替の7タイプである。下の図はターン交替の7タイプを画いたものである。

ターン交替の7タイプ



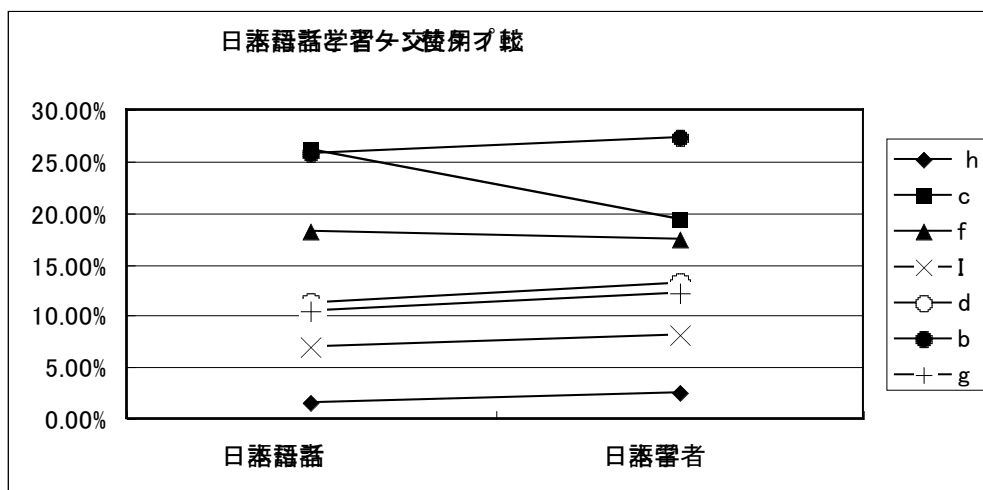
この7タイプで、会話資料を分析したら、次のような結果が出た。表1は日本語母語話者と学習者の会話に出現したターン交替のタイプの数とターン交替の全体の中で占める割合である。

表1：日本語母語話者と学習者におけるターン交替のタイプ別出現個数と頻度

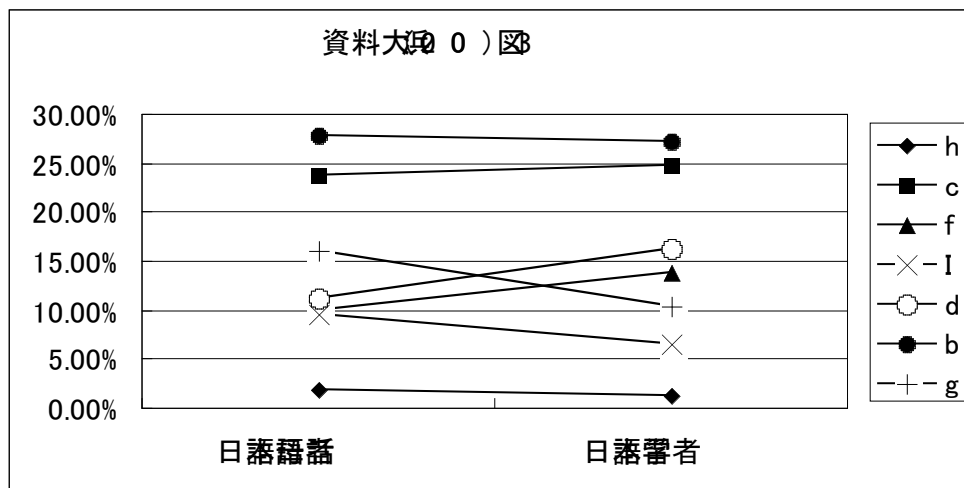
	h	d	c	b	f	g	i	合計
日本語	27	187	437	432	303	174	116	1676
母語話者	1.6%	11.2%	26.1%	25.8%	18.1%	10.4%	6.9%	100%
日本語	33	167	247	346	222	155	104	1274
学習者	2.6%	13.1%	19.4%	27.2%	17.4%	12.2%	8.2%	100%

また、母語話者と学習者のターン交替のタイプの頻度を比較して、グラフを作った。グラフ I がそれである。グラフ II は比較のために大浜(2000)から取ったグラフである。

グラフ I



グラフ II



I. このグラフを大浜(2000)と比較すると、共通するのは相手から譲られてターンを取る(d)タイプの使用頻度が、学習者のほうが母語話者より高いということだけで、他のターン交替のタイプは二つの資料で逆になっている。このように、大浜(2000)とはだいぶ異なる結果が出た。

II. 今回の談話資料についての、母語話者と学習者のターン交替使用タイプ比較を考察し

てみると、以下のような点に分かる。

①母語話者と学習者の両方からともhという話の途中で割り込んでターンを奪うタイプはほとんど見られない。これは例外の現象だと言われている。②母語話者は学習者より相手からターンを譲られて取る(d)タイプが少なく見られる。これはIにも言ったが、大浜(2000)と同じ結果で、大浜(2000)が言ったとおり、母語話者には、学習者とも比較において「現在の話者が次の話者を選択しない傾向」があると言っていいだろう。③グラフから母語話者は学習者より自らターンを取る(c)傾向が高いとすることが分かる。また、ターンを取らない(b)タイプも同じぐらい出現したことが分かる。②で、母語話者は明らかな形でターンを譲る傾向が少ないと言った。おそらく、母語話者は自ら相手のターンが続くかどうかを判断し、続くとみなす場合にはターンを取らず、終わったとみなす場合には進んでターンを取る傾向がある。それは、母語話者なら、話し手の発話の内容や文末表現などから、相手のターンが続くかどうか判断できるからだと言える。

①今度はcとdの差を比べてみよう。母語話者のcの頻度は26.1%、dの頻度は11.2%で、その差は14.9%である。それに比べて学習者のcの頻度は19.4%、dの頻度は13.1%で、その差は6.3%しかない。このように学習者の場合は、cとdの差が小さくなっていて、学習者の方が明らかに分かるような形でターンを譲る傾向が高いと言える。明らかに譲られてない場合は、あまりターンを取らないため、bの頻度が高くなっている。それは、学習者は、母語話者よりも発話の内容や文末表現などから相手のターンが続くかどうかの判断が難しくなり、dのように明らかにターンを譲られた方がターンを取りやすいからだと言えるだろう。

②もう一回最初に戻って、hを考えてみると、こういうのも考え得る。hの頻度は母語話者が1.6%、学習者は2.6%で、全体から見ると頻度が低い。しかし、この少ない頻度において、母語話者と学習者の間に、1%の差があるのはかなり大きいと思える。これも、③、④での考察と同じく、学習者の方が話しての発話が続くかどうかうまく判断できずに、文の途中でターンの終わりごと判断してしまって、相手のターンを結果的に奪ってしまったということも考えられるだろう。

5. 終わりに

今回の研究は大浜(2000)を参考にして、同じパターンで会話資料を調べた。しかし、結果はグラフI、IIで示されたとおりかなりの相違が見られた。その相違が生じた原因としては以下のようなことが考えられる。

第一に、ターン交替の分類の基準は同じでも、分類の際に違いができてしまったと考えられる。

第二に、留学生の日本語能力は皆中級以上であったが、留学生ペアの中で、どうしてもある程度日本語運用能力の差が生じ、運用能力の高い方が主にターンを取ってしまってい

るという可能性も考えられる。

また、記号でターン交替タイプを分類したのは、あくまでもまだ表面しか見てないので、話の内容によっては自ら進んでターンを取る c タイプも、使い方によっては相手に発話させる機能を果たしたかもしれない。まだ全部は調べてないが、少し見た限りでは少なくとも c の後ろに 30% ぐらいは d というタイプが来ている。例

A : 捨てるのもったいないよねえってね、洗って使おっかーって

B : (c) え、もらって帰ったん？

A : (d) ううん、忘れて帰った

のようです。

それでこれからの課題として、もう一回会話をよく読み、形だけではなく、内容からもターン交替を分析してみようと思う。

参考文献

- 大浜るいこ 「日本語のターン交替と相づち —母語話者と学習者の比較を通して」 『広島大学教育学部紀要』 第二部 第 49 号 2000 153-161
- 堀口純子 「日本語教育と会話分析」 1997 年 くろしお出版
- Sacks, H. /Schegloff E. /Jefferson G. :A simplest systematics for the organization of turn-taking for conversation. language, 50, 696-735